

第76回

会社訪問

東京光電株式会社

会社プロフィール

代表者：代表取締役社長 諏訪昌樹

所在地：〒120-0005 東京都足立区綾瀬5-24-5 スエヒロビル3F

TEL：03-5613-7555 FAX：03-5613-7560

設立：1949年4月

資本金：2,400万円

従業員：12名

営業所・工場：諏訪工場、高松事務所

事業内容：光電素子を検出器とする光度計類の製造・販売・研究試作の受託、医療用検査機器の製造・販売・研究試作の受託、精密機器部品の製造・販売・研究試作の受託など

URL：<http://www.tokyokoden.com>

東京光電（株） 代表取締役社長 諏訪昌樹 氏へのインタビュー

聞き手：山口美奈子（広報委員） 山河正道（事務局主任）

（取材・編集協力：クリエイティブ・レイ株）

国産初の光電光度計を開発した“光分析”の技術を活かし 医療用検査機器や特殊精密機器部品の分野でも活躍

— 御社の主な事業内容をお教えいただけますでしょうか。

当社は昭和24年に、光電池によって光を電気情報に変える技術に注目した創業者が、これを比色計に利用することで社会貢献をしようと、当社の前身となる光電研究所を立ち上げました。以来、当社は小さいながらもまとまった「盆栽的会社」としてやってきました。

こうして現在では、比色計生産という主力の枝を継続し、照度計を主力商品として展開しています。そのほか分光光度計、濁度計、原子吸光光度計、炎光光度計などの科学計測機器、また一方で、比色計

の技術を応用した血小板凝集能検査装置などの医療用検査機器に事業の枝を広げてまいりました。なお、それらの事業ほか、長野県諏訪町の工場ではOEM生産なども行っています。

— 扱っている分析機器、計測機器、医療用機器の中で、特化している分野はあるのでしょうか。

分析機器、計測機器、医療用機器の売上の割合は、現在は3分の1ずつになっています。ただ、比色計とほぼ同時期に始まった照度計などは、当社が日本のシェアの約6割を持っていたこともありました。



照度計ANA-F10



炎光光度計ANA-135



血小板凝集能検査装置



蛍光光度計を調整する技術系女性スタッフ



諏訪社長と少数精鋭の設計・技術スタッフ

— 創業は 1949 年ということですが、ご存知の範囲で、創業時の様子などをお聞かせいただけますか。

当社も 67 期を迎え、社長も代替わりをしております。私は 5 代目社長となるため創業当時のことは資料と口伝によるものとなりますが、昭和 24 年当時は、光を電気に変える方法という真空管でした。そんな中、創業者が発表した比色計は最先端の理化学機器で、世の中にない製品として全国の学校や研究機関に一気に普及したそうです。中でも 1 型と呼ばれた比色計は、当時としては画期的なモールド成形品を利用した製品でした。薬品を使う科学検査装置としてはとても丈夫で、大ヒットしたそうです。

当時、少品種大量生産を目指す経営者が多かった中、当社の創業者は反骨精神からか、多品種少量生産でも会社が存続できることを示したいとチャレンジしていったようです。その経営を受け継ぎ、当社ではこれまで使いやすく、安価で、高性能な光分析装置の開発生産に挑戦し続けてきました。

— 照度計などが主力商品とのことですが、今後はどのような商品を開発していくのか、事業目標などについてはどのようにお考えでしょうか。

このところ OEM に注力しすぎたところがあるため、今は自社製品のリニューアルにも力を注ぎ、製品の充実に取り組んでいます。その中でキーワードとしているのは、いわゆる「ユビキタス・アナライザ」です。具体的には、機器による計測結果をコンピューターのクラウド上に残し、パソコンやスマートフォンにネットから直接取り出して表示する、そ

うした機器を目指しています。

また、このところ照度計に関する新たな要望が出てきており、これについても考えていきたいと思っています。1 つは、20 万ルクスという外光が計れる照度計を欲しいという要望があります。主な目的は農業やソーラーパネルなどで、ソーラーパネルであれば、照度と出力の関係を知りたいというものです。太陽光をより積極的に利用しようと思えば、その正確な測定も必要になってくるというわけです。この点、照度計をソーラーパネルの近くに置いておき、計測結果はネットを使ってスマートフォン等で見るといった使い方をするとき、私たちが目指すユビキタスの機能も生きてきます。

今後、太陽光の利用がもっと進めば、この分野の市場も大きく広がるのではないかと考えています。現在、ソーラーパネルの購入には補助金が出されますが、計測する方にもなんらかの補助があればいいように思います。

もう 1 つは、省エネルギーが求められるようになったことと、明るさを調整できる LED が普及したことに関連しています。学校や事務所の机の上は 500 ルクスが必要とされていますが、外光を取り入れられれば、その分、室内や手元の照明は暗くてもよくなります。昔は室内の照明は消すか点けるかでしたが、今は机の上の照度を計算し、LED によって明るさを調整できるようになりました。こうした研究会を大学や大手ビル管理会社などが協力して立ち上げており、当社の照度計などを使っていただいています。

私たちの業界では、このような使い方でも一般の方にも照度計を買っていただくためには、照度計の価格が1万数千円程度になる必要があるのではないかとされています。

— これまでに経営者として強く印象に残ったお仕事があれば、お聞かせいただけますか。

私が社長に就任したのは今年の8月ですので、経営者としての話ではないのですが、営業時代の出来事で印象に残っていることがあります。そのころ1台1200万円ほどの機械を直接売り込みに行っており、ある程度脈のありそうな会社に根気よく通っていました。ところが、アポイントをとっていた日に、電車が止まるほどの台風がやって来ました。

私は前日からその会社の近くに泊まり込み、アポイントの時間を守ってお客さまの会社に伺ったのですが、お客さまからはこんな日によく来たと言われてしまいました。しかし、そうしたこともあり成約していただき、お客さまに感謝するとともに、大きな達成感を感じたものでした。私はほとんどは開発に携わっていたのですが、一時期、営業におり、今でもよく覚えている仕事となりました。

— 開発が長かったということですが、営業に異動されたのは何か理由があったのでしょうか。

私の専門は化学だったのですが、マイコンが好きで、当社の機械のプログラムはほとんど私が作っていました。そんなことをやりながら開発をやっていたのですが、四国に高松工場を設立することになりました。やがてちょっと体調を崩し東京に引き上げてきたときに、営業強化のため営業部長をやりたいということになったのです。

現在は家族のいる高松に開発業務を行う事務所を持っています。そのため今は、月の半分は東京で社長業、もう半分は高松で開発の仕事をするという生活を送っています。そして、高松と東京を行き来する間に長野県の諏訪工場に寄ったり、名古屋や大阪のお客さまのところに立ち寄りして、移動を効率良く利用しています。

— 印象に残ったお仕事とは別に、困難だと感じになった時期や出来事があれば、お話しいただけますか。

経営者としてはまだ1年生の初心者マークですので、強いて言えば、現在は毎日が困難克服の連続のようなものです。

— 御社の経営方針や経営理念などをお聞かせください。

先ほども触れましたが、盆栽のように小振りながらもまとまりのある揺るぎない会社でありたいと思っています。その中で、最先端を常に心がけ、意欲旺盛にチャレンジを進めております。

盆栽について少し説明すると、盆栽というのはただの小さい木ではなく、小さいうちから、こういう形にしようと枝振りを考え、育てていくものです。どこかが急に伸びたりすれば、形は崩れますし、そこに栄養が持っていかれて木自体が枯れてしまうこともあります。形をわざと崩した盆栽もありますが、バランスのとれたまとまりのある盆栽は、小さくても大木のような重量感を感じさせます。

盆栽は木の特性を理解し、伸ばすところと抑えるところを見極めないとはいけませんし、形を保つためには日頃からしっかりと手入れをしなければなりません。そんなところは会社経営に通じますし、生きているものを制御し育てていくという醍醐味は、盆栽も会社も共通のもののように思います。



アットホームな雰囲気は、諏訪社長のお人柄から…

——経営方針とは別に、座右の銘、愛読書、敬愛する歴史上の人物、心がけているモットーなどあればお聞かせください。

あまり人に話すことはないのですが、個人的には平家物語の世界観が好きで、世の中でいろいろな事件が起こったときなど事あるごとにその世界観に共鳴したりしています。平家物語は衰退の美、枯れの美学ですが、冒頭の諸行無常の言葉は衰退だけを示しているのではないと思っています。つまり、下から這い上がろうとする者にとっては、撃破不可能と思える巨大な敵も、たゆまぬ努力をコツコツと続けていけば、思わぬときにチャンスが生まれ、倒すことができる、それを示した励ましの言葉であると解釈できます。

ですので、日頃から何がチャンスになるのかを研究し、常にチャンスを狙い、その片鱗が見えたときに溜めていた力をタイムリーに噴出させて突き進む、それができる機敏さ、臨機応変さも大切であると思っています。

——盆栽や平家物語についてお話ししていただきましたが、それらに興味を持たれたきっかけや理由があるのでしょうか。

1つは私の育った四国の土壤が影響していると思っています。盆栽に関しては、出身地の高松市に鬼無という盆栽の里があります。この地域は畑で野菜を育てるように盆栽を育てているようなところですよ。

また、生まれが四国ですので、小さい頃からお遍路さんに接しており、文化的な影響を受けているのだと思います。直接的に仏教を信仰しているということではないのですが、仏教思想やその考え方は好きで、教典などを斜め読みすると、成る程と思うことはよくあります。

——趣味、あるいは休日に楽しんでいることがあれば、お聞かせください。

東京と高松を行き来しているため、休日は四国の家で土いじりや庭木の整枝などを楽しんでいます。ガーデニングと呼べるほどの整った庭ではありませんが、見よう見まねで植木職人のまねごとをしています。



5年間、同じ株のランの開花に成功しています。
その秘訣は従業員に接するのと同じ思いやりです。

実は東京は単身赴任で、高松の家には家族がおり、そこで過ごす休日はリラックスできる時間となっています。天気の良い日に庭でハーブの香りなどをかぐと、心が癒されるのを感じます。庭には桃、プラム、キーウイなどいろいろな果物の木もあり、のんびりするにはいいところです。ただし、木が大きくなりすぎて、枝打ちにチェーンソーが登場するときなどは、剪定とは実にスポーツ的だと思うこともあります。

——東京協会に対してご意見やご要望がありましたら、お願いいたします。

業界内での交流会はよくありますが、希望としては、もっと新規受注開拓が可能となるような異業種の交流機会があればと思っています。名刺交換だけで終わってしまうような交流会ではなく、もう少し交流を深めていけるようなアイデアを盛り込んだ交流の場を作っていただければと思っています。

また、冊子の『科学機器』は当社では社員、皆で回覧して見ておりますが、個人的にはこの「会社訪問」のコーナーに興味深く拝読しています。いろいろな会合に出向きますが、このコーナーに登場した方にお会いしたときなど、あらかじめ記事を読んでいたのも、会員様と話が弾んだということもありました。このコーナーは会社の説明だけでなく、それぞれの方の仕事・人生観、趣味のお話などがあるのも良い点だと思っています。